

変革期の中にある世界の大学

県教育庁教育次長

高 見 英 樹



ミネルバ大学という大学をご存知だろうか。2014年に開校したキャンパスのない新しい形態の大学である。学生は4年間でサンフランシスコやブエノスアイレス、ソウルなど世界7都市をまわりながら、現地の企業や行政機関、NPOとの協働プロジェクトやインターンを行い、学習を深めていく。ここでは、授業はすべて「オンライン」で行われる。

一方、国境をまたいだ大学間の「国際連携」も進んでいる。単位互換制度を活用し、複数の大学が学位を授与する「ダブル・ディグリー」や、共同で学位を授与する「ジョイント・ディグリー」など仕組みは国内大学でも浸透しつつあるが、この取組をより進化させたものとして、「国際共同大学」という形態も現れている。リバプール西安交通大学や昆山デューク大学のように国境を超えた合弁による大学では、英国・米国と中国両国の大学の学位を得られるようになってきている。

このように世界では、大学の形態は大きく変化しはじめている。その中で今回のコロナ禍である。「オンライン」化への流れは、またたく間に、世界中の大学教育の在り方を変えた。例えば、ケンブリッジ大学は、今年度の講義を対面では行わないと発表している。今

後、海外に留学を希望する者の志望進路にも変化が生じ、留学生に大きく依存する大学は、授業料収入等の財政面で大きな影響を受けるのは間違いない。現に、多くの留学生を輩出する中国から英国の大学への留学を懸念する声なども出ており、年間40億ポンドの授業料収入のある英国の大学も最大で6割程度、留学のキャンセルが出るとの予測もあるなど、大きな損失を受ける可能性があると報じられている。

そのような中、世界中の大学で今後、留学生の獲得競争が変化し、激化して行くことが想定される。今後、「オンライン」をフル活用し、大学間で「国際連携」を進めながら、大規模に学生獲得に乗り出す大学が出てくることも想定される。主な授業は、「オンライン」で行い、各国に拠点的な施設を設けることで、試験や実習などを行えるようにする。そうすることで、より多様な学生を受け入れ、教育及び研究の質を高められるようになる。そういった形態の大学が現れてくることも考えられる。

このような今後生じうる世界の大学の変化に対して、初等中等教育に携わる者として、我々はどう対峙していくべきか、注視が必要である。